平成３０年度　事業報告書

連続講座

「プロフェッショナルに聞く！～

文化庁移転と文化芸術の未来～」

第８回　「建築×暮らしの文化」

○実施日　平成３１年２月２３日

○会場　　mumokuteki ホール

（京都市中京区寺町通蛸薬師上る式部町 261　ヒューマンフォーラムビル 3F）

○出演者

ゲスト；

井上 えり子氏（京都女子大学准教授／工学博士／建築計画学）

前田 尚武氏（一級建築士／学芸員／長谷ビルクリエイティブチーム（京都市美術館リニューアル準備室））

ファシリテーター；

平竹 耕三（京都市文化芸術政策監）

第８回プロフェッショナルに聞く！
文化庁移転と文化芸術の未来

平成 31 年 2 月 23 日（土）

＜ゲスト＞

井上　えり子氏

（京都女子大学准教授／工学博士／建築計画学）

前田　尚武氏

（一級建築士／学芸員／長谷ビルクリエイティブチーム（京都市美術館リニューアル準備室））

＜ファシリテーター＞

平竹　耕三

（京都市文化芸術政策監）

平竹：皆さんこんにちは。本日はようこそお越しいただきまして，ありがとうございます。今日は「建築×暮らしの文化」がテーマです。今年度の文化庁京都移転の機運を醸成する連続講座は，暮らしの文化をテーマにしています。前回は，衣食住の「衣」，ファッションを取り上げましたが，今回は「住」を取り上げます。

1 人目のゲストは，京都女子大学准教授の井上えり子さんです。実は私は，井上さんとは，2008 年 3 月に実施した「京都発・花街の文化とまちづくり」というシンポジウムで初めてご一緒し，その後，この「京の花街ーひと・わざ・まち」という本を書きました。上七軒で，実際に元お茶屋の建物をお買いになって，お住まいになり，まちづくり等に携わっておられます。

他方，長谷ビルクリエイティブチームの前田尚武さんは，一級建築士でもあります。美術館の中にいらっしゃる建築士ということで，展示のデザインにも非常に明るい方です。皆さん，ご承知かと思いますが，現在，京都市美術館は，再整備の工事中です。建物は昭和 8 年建設で，今でちょうど 85 年ぐらい経っています。有り体に申し上げると，今の京都市の中には美術館を建築するノウハウが，ほとんど残っておりません。そのため，前田さんには，森美術館に在籍されていた頃から，アドバイスをいただきながら，現在は長谷ビルクリエイティブチームの一員として，美術館の現在から再整備後の運営等も含めて，お手伝いをいただいています。「日経アーキテクチュア」（2018 年 12 月 13 日号特集）という雑誌の「編集部が選ぶ 10 大建築人 2019」7 位に入ってらっしゃいます。

今日は様々な活動の経験や研究等の知見も持っていらっしゃるお二人と，お話を進めていきます。

ちなみにお手元に私の家のことを書いた資料もお配りしています。景観・まちづくりセンターが開設された頃，町家についてお話しした

ことを載せていただきました。私の家も 1904 年に建った町家で，何回も直しながら住んでいます。しかし，町内にホテルが 2 軒もできて，随分と街が変わってきましたし，近所の友達は「住める環境ではないな」とも言っています。また，この資料の頃にはまだ子どももいましたが，順番に独立してだんだん減っていくので，これからどうしようかなあと考えています。京都の街の課題でもあり，私個人の課題でもあり，今日のテーマにも関わりがあると思います。

前置きが長くなりましたが，暮らし，住むということは，文化を育むという意味でも重要なことだと思います。では，まずお二人には，文化と建築ということを織り交ぜながら，自己紹介も含めて，お話しいただきます。それでは，最初に井上さんから，お願いします。

井上：京都女子大学の井上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

自分の自己紹介のスライドを作るときに，何かタイトルは付けたほうがいいだろうと思いまして，「暮らしの文化を守るには」としました。先ほどご紹介いただいたように，私自身はもともと，関東で育っております。大学までは東京の大学を出まして，実は京都に来たのは，京都女子大学に仕事が決まってからです。京都には旅行では来たことがありましたが，1995 年以降に初めて住むようになりました。私は建築，特に住居を研究テーマにしています。京都に来てみると，やはり住文化のようなところに目を向けざるを得ないくらいに，圧倒的な文化，文化力がありました。なかでも「地域」がとても重要なキーワードになると思いながら，京都の中でまちづくりを進めております。

東京の頃から，住宅や住環境に関して研究していましたが，京都では，まちづくり活動をはじめ，花街の建築文化，空き家問題，洛西ニュータウンの古い UR 団地のリノベーションの産学連携プロジェクトを行っています。特にこの花街，空き家，リノベーションについて，自己紹介を兼ねてお話します。

まず花街のことについて，簡単に説明します。「花街とは何か」はいろいろな分野で定義されていますが，実は建築の分野では，ほぼずっと定義されてきませんでした。平竹さん等との交流の中で，いろいろと研究させていただき，この 4 種類の建物がある所だと考えています。1 つ目が歌舞練場です。歌舞練場は，祇園甲部の歌舞練場が一番有名ですが，現在京都にある 5 つの花街はそれぞれの歌舞練場を持っています。舞妓さんや芸妓さんの踊りを披露する場所の専用劇場のことですね。その中のいくつかは，まだ木造です。木造の劇場が現役で使われているのも，非常に貴重なことです。2 つ目が稽古施設です。学校となっているところもありますが，舞妓さん，芸妓さんの技能を磨く場所です。3 つ目に組合事務所です。検番と呼んでいるところもありますが，舞妓さんや芸妓さんのお花代とかを一括管理しているオフィスです。4 つ目はお茶屋さんです。京都では屋形と言います

が，もちろん住宅の部分もあります。他都市では置屋さんという言い方をしているものですね。

私は，先ほど平竹さんのほうからご紹介いただいたように，5 花街の中で上七軒という花街で住むようになりました。最初は西陣を見たのですが，街中ということもあって，ちょっと住宅の値段が高い。それで，少し西陣の外れたところにある上七軒で探していたら，たまたま長い間，空き家になっている物件を見つけました。その建物は取り壊わすことも検討されていたのですが，建物を残して，そのまま住んでくれるならば，ちょっと安くしてあげてもいいよということでしたので，購入して，直して，今住んでいます。

この写真の建物が，我が家です。ちょうど「北野をどり」のときの写真なので，軒先にちょうちんが下がっていますね。北野をどりの時期になると，歌舞練場から誰かが軒先に掛けに来るので，そういうものなのだろうと思って，かけたままにしています（笑）。

私は，それまで本当に不勉強で，芸妓さんや舞妓さんは，夕方以降にお仕事をする人たちという認識でいたのですが，住んでみたら，朝早くから，舞妓さんが，街の中を行ったり来たりしていることに気づきました。それは住んでいる置屋さんのお母さんから，ちょっと用事を頼まれて出かけたり，彼女たちは修行の身でもあるので，いろいろなことをこなしたりしています。そして 10 時以降になってくると，今度はお稽古に出かけます。お稽古は，日本舞踊，茶道，小鼓，三味線，太鼓，長唄，小唄，常磐津，笛等を一生懸命に修行されています。彼女たちは，おそらく，もっと楽な職業を選ぶことも出来たはずですが，「伝統芸能を守るのは自分たちだ」という気概を持ちながら修行しています。中学校を出て，あるいは高校を卒業して来られる方もいらっしゃいますけど，その頃の女の子の純粋なひたむきさで，一生懸命やっておられます。私は，そこに大変心を打たれました。こういう人たちが守っているんだ，いったい自分は何をやっているんだという気持ちになりまして，自分でできることは何か，花街をどうすれば守れるかという思いに駆られて，花街の研究をやっています。

それから，京都の空き家問題にも取り組んでいます。先ほど，我が家が空き家だったというお話もさせていただきましたけれども，京都市は，全国の中でも空き家が多いほうです。その中でも京都女子大学のある東山区は，22.9％と，断トツに空き家が多いのです。東山区には，花街で言うと祇園や宮川町があり，あるいは清水寺や三十三間堂等，様々な観光施設や観光スポットがたくさんあるにも関わらず，どうしてこんなに空き家が多いのだろうというのが，まず大きな疑問でした。22.9％とは，4 軒に 1 軒ぐらいが空き家ということですが，その地域で生活している人間としては実感がありませんでした。ただ，このまま放っておいたら大変なことになるなという危機感から，空き家問題について取り組んでいます。

例えば，この建物は，表から見ると，空き家と言っても，普通に建っている町家に見えます。でも中に入ると，このように崩れ落ちかかっています。つまり外から見ると，空き家が普通に建っているように見えても，実は中に入るとかなり危険だなっていうことがわかってきました。

それで六原学区という六波羅蜜寺の周辺の学区で，地域の皆さんと一緒に空き家調査や空き家対策を 2006 年から始めました。現在は，その空き家対策の一環で，空き家見守りボランティアをやっています。所有者さんから鍵をお預かりし，学生が月に 1 回お宅に訪問して，中を開けて換気をします。実は建物が崩れていく理由は，換気，湿気です。湿気がたまると，木造住宅は腐って，崩れていきますので，換気が一番大事です。換気をさせていただいて，あとは雨漏りのチェックをしています。この写真では，少し分かりづらいですけれども，雨漏りの跡があるのを発見すると，報告書にして所有者さんにお送りします。雨漏りの跡があっても，それが進行してない，ずっとそのままであれば，一回雨漏りしたかもしれないけれど，単に今は雨漏りしていないだけという可能性もあります。毎月毎月その染みの跡を見て，広がっていくようだと緊急に対応したほうがいいですよということを御連絡しています。お宅の所有者さんは必ず，「いや，うちは雨漏りしていませんから」とおっしゃいますが，見守りボランティアしてみると，必ず雨漏りしていますね。空き家になった時点では雨漏りしていなかったと思いますが，何年か経てば，空き家は自然と雨漏りしていきます。御本人は気づいていなくても，瓦が欠けるなどちょっとしたことで，雨漏りしていくのです。それをこちらから御連絡すると，所有者さんもさすがにそれはまずいから，屋根を直そうかという話になります。でも，お金がかかるから，それでは活用しようかという話になるので，建築士さんなどとも連携しながら活用の御相談に乗っています。

その空き家の活用例が，こちらの二軒長屋です。所有者さんが，「活用したいけれど，特に家賃を取るつもりもないし，学生が DIY をして学生と地域で活用する地域のコミュニティ施設みたいな感じにできるといいなあ」と言ってくださいました。ですので，4 月オープンに向けて，今ちょうど学生が DIY を一生懸命にやっているところです。

次に洛西ニュータウンの話です。先ほども少し申し上げましたが，洛西ニュータウンでは，旧住宅公団の UR 都市機構とコラボをしています。古い団地の間取りは，全部個室が和室になっており，若い家族がなかなかそこに住もうという気になりません。それで，団地の空き家が増えています。また一方で，高齢化も進んでいるので，それを何とかしようというプロジェクトを 2012 年に企画して，2013 年から始めました。

これまで学生が設計した 14 タイプ 77 戸の住戸を供給しています。例えばこのようなものです。キッチンは予算の都合上，変えてはいけないということでしたので，古いままです。上にシートを貼ったり，磨いたりするのは向こうでやってくださいます。この写真ではきれいに見えますが，シートを貼ってごまかしています。換気扇ですが，今の新しいキッチンですと上部

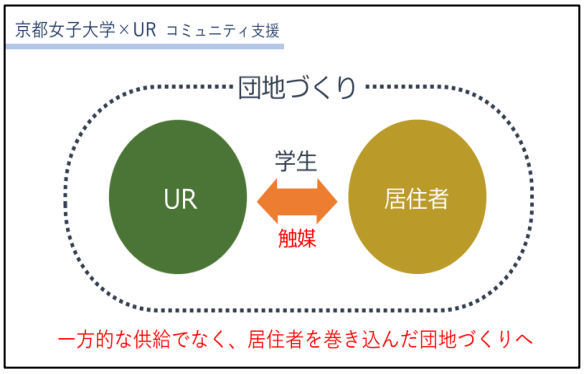
に換気扇フードが付く形になりますが，これは壁面にファンが付く古い形のままです。それも予算の都合で，変えられなかったので，それを逆手に取って，このように青いタイルを貼って空間のアクセントとしています。できるだけ安い予算で，いったいどれだけできるかという試みです。リノベーションは，専門の雑誌ができるほど，大変人気がありますが，大抵は個人所有のマンションで，500 万円から 1000 万円くらいの費用をかけています。でも，賃貸はそんなに予算がかけられません。この UR も予算 80 万円でやっていますので，学生が考えに考えて，お金をかけないリノベーションをしています。

「無限のハコ」（2013 年作品）

こちらは全部取り払って，バルコニーまで土間がずっと続いてるっていうような間取りです。これは学長賞を取りまして，少し予算オーバーしましたが，何とか造ってもらいました（笑）。

これは 2015 年の作品で，収納をテーマに考えたものです。一部屋をなくして，インナーテラスを造って，玄関を広くしています。私の大学では，地方出身で団地やマンションに住んだ経験のない学生が多いので，みんな集合住宅のドアを入ったときの暗さと狭さに，違和感を覚えるようです。ですから，玄関を広くして明るくすることに，結構お金を使います。これが特にそれに特化した案です。ここも収納で，こちらもウォークインクローゼットになります。

また，「京都女子大学×UR」というプロジェクトの中では，住戸の中だけではなく，団地全体のコミュニティ支援もやっています。団地というのは，UR だけが一方的に造って，供給していればいいわけではなく，そこに居住者さんも加わって，みんなでずっと造り続けていくものですが，現実的には供給する側と居住者さんにはあまり接点がありませんでした。そこを学生たちが触媒になって，リノベーション物件に新しく住む居住者さんだけでなく，これまでずっと住んでこられた居住者さんも含めた全体での団地作りを考えていこうと考えたのです。例えば，団地に愛着を持ってもらいたいなとか，あるいはみんなでコミュニケーションを取ってほしいなという思いから，共用階段にある古くて，ペンキがはがれていたメーターボックスをみんなで塗り替えるイベントを実施しました。写真にはたまたま私が写り込んでいますが，準備は学生が半年間居住者さんと進めてきました。ここでは，色を最終的に決めているところですが，何度も何度もやり取りしながら，決めました。手前の人たちは，パソコンで自分たちの家の表札のデザインをしています。UR 側が表札のデザインもそれぞれ自由に選んで良いと言ってくださったので，学生が居住者さんの希望に合わせて色，フォントなどをデザインしました。



2015 年には，今度は居住者さんのほうから，集会所の内装があまりにも古いので，何とかしたいという要望が出てきました。では，それをみんなで考えましょうということで，学生が半年かけて色や材質を話し合いました。実際に居住者さんと学生と UR の若手職員，みんなで塗り替えをしました。壁は黒板塗料が塗ってあり

ます。これは居住者さんの要望で，子どもたちがここで自由にお絵描きできるようにしたいということでしたので，黒板のようにチョークで描ける塗料を塗りました。

最後のまとめとして，2 点あります。1 つめは，ずっとこれまで活動をしてきて，古いところだから文化があるとか，新しいところには文化がないとかいうことではなく，それぞれの地域にそれぞれの文化があり，それを守っているのが地域力だということです。地域力を守ることが，文化を守ることにもつながっていくと実感しています。

そしてもう 1 つは，日本人の多くは，京都に行けば舞妓さんに会えるだとか，あるいは町家の街並みが広がっていると思い込んでいます。今日お越しの皆さんは，おそらく京都にお住まいの方が多いと思いますが，実際の京都は，街中を歩いてみても普通の街で，そこにぽつんぽつんと町家があるくらいで，実はもうイメージの「京都」は，ごく一部しか残ってない。それをどうやって守っていくのか。これまでは所有者さん個人とか，あるいは京都市の助成金制度のように地方自治体によって，守るのが一般的な考え方でしたが，本当にそれで守りきれるのか。もうこれ以上，町家を減らさないためには，みんなで何ができるのか考えていかなければならないと考えています。

平竹：ありがとうございました。花街の建築文化，空き家，UR とのコラボレーションと様々に活動されているお話でした。後のテーマにもつながりますので，簡単に 1，2 点お聞きします。

花街でお茶屋の空き家を買われて，お住まいになって，最後のお話でも地域力が大事だということでした。そうしますと，その地域にある井上家の暮らしの文化と上七軒の暮らしの文化の関係は，どう感じておられますか。

井上：花街における「地域」は，実は結構複雑で，一つの地域の中に，例えばサラリーマンの方も住んでおられますし，西陣の職人さんも住んでおられますし，花街の方も住んでおられます。だから花街の文化もありますし，例えば地蔵盆のように必ずしも花街だけではない，様々な暮らしの文化があります。多様な文化の総体が上七軒という地域の文化と捉えています。それを全部セットで守っていくのが地域の力で，とても重要です。そこを補強していかなければ，なかなか全体を守っていけないなと考えています。

平竹：なるほど。そうしますと，井上さんは，東京から来られて，京都に住むようになったからこそ，そのような文化の中の生活をされていると理解したらよいでしょうか。

井上：そうだと思います。町家に住みたいという何となく漠然としたイメージから町家に住み，地域で生活する中で様々なことを学び，自分がやるべきことの方向性を見つけてきた感じがします。

平竹：ありがとうございます。次に UR のことをお伺いしますが，DIY という言葉が出てきました。その言葉の解説を簡単にお願いします。また，その UR で学生さんがデザインされて部屋をリノベーションされたということでしたが，狙いどおりに若い世代が入居したのか教え

ていただけますか。

井上：DIY とはプロではなく，素人が自ら施工をする，実際に造るということです。UR の住戸に関しては，学生は設計だけで，実際にプロの方が施工をされています。今はおかげさまで，募集を出せば，必ずどなたかが入居してくださる状況です。UR からも空き家が解消されつつあると言っていただいています。

平竹：ありがとうございました。それでは引き続きまして，前田さんから発表をお願いいたします。

前田：前田です。よろしくお願いします。京都市から，①出身，これまでの経緯，②京都に対して思うこと，③自身の活動と仕事内容というお題をいただきましたので，これに沿ってお話します。

最初に，出身のことです。実は私は，幼少期を香港とシンガポールで過ごしています。今のように地下鉄が走っていたりとか，高層ビルが建っていたりする時代ではありませんでした。シンガポールの地下鉄が走っているところは，もともとは運河でした。高瀬川みたいな感じでしょうか。幼少期には，スコールが起きて氾濫すると私もそこで泳いでいました。もちろん，テレビもないですし，日本の情報が全然入ってきません。その中で私にとっては，日本が非常にあこがれの国でした。特に京都に対する思いがどんどん強くなっていきました。入手できる情報としては，漫画がやっぱり大きかったですね。小学校 1 年生のときに，とある漫画を見て，大工になりたいと絵日記に書いたら，大工もそうだけれども，建築家という仕事があるんだよと教えていただいたのがきっかけで，建築家を目指そうと思いました。

そんな中で，高校生の頃から，休みになると京都に来て，近現代建築を 1 人ずっと見て歩いていました。その頃は，例えば TIME’S で安藤忠雄にあこがれて，安藤さんの建築現場に入れてもらったこともあります。大学院を卒業後はフリーで建築家として設計活動をしました。

私が感銘を受けたという漫画が「サイボーグ 009」という 1966 年ぐらいの漫画です。今見てもすごいと思うのですが，作中の住宅がこのようにヴォールトの屋根にガラス張りの連続した空間で，断崖絶壁に建っています。中にダイヤル錠のしっかりしたセキュリティのボタンがあって，シャッターの自動ドアの中に入ると何にもない空間です。しかしボタンを押すと，そこから椅子が飛び出てきたり，テーブルが出てきたり，テレビが出てきたりと，まさに IT の未来の家みたいでした。

それを見て，建築家にあこがれていたわけですが，その後そっくりな建築に出会いました。これは，フィリップ・ジョンソンという有名なアメリカの建築家の手がけた私が好きな美術館（Amon Carter Museum of American Art）の一つです。このフィリップ・ジョンソンは，ニューヨーク近代美術館に 30 歳から 50 歳まで勤め，歴史に名を残すような建築の展覧会を数々作り上げています。そして晩年から建築家としてデビューした世界的な建築家です。私は，一級建築士で学芸員という仕事を 20 年くらいしていますが，同じような仕事をしている人には出会ったことはありませ。でも，過去にはこのフィリップ・ジョンソンがいます。絶対にか

なわないですが，今の私の目標になっている 1 人です。

次に，「京都に対して思うこと」です。私の視点からは，「京都は生きた建築のミュージアムだ」と思います。今の京都が作られたのは明治の奠都以降に京都市が行った都市計画であり，その中に大きなヒントがあります。例えば 1 つだけ紹介すると，大正 11 年の京都の都市計画です。大正時代初期は，日本全国が都市計画ブームでしたが，その中で行政が中心になって，土地区画整理をして，都市の拡大化を防ぐことができたのは，実は京都だけです。その片鱗が残っているのは，東西南北の大路がついている何々大路という道路です。京都の地図を見ると，大路に囲まれて，C の形になっている内側のところを，きちんと碁盤の目の状態に整備をし直し，そこだけを集中的に整備しています。実は東京やほかの都市もそういったことを試みていますが，実現できたのは京都だけでした。この結果，歴史都市，観光都市，生きた建築ミュージアムとしての今があると思っています。

次に私の仕事を紹介します。先ほど申し上げましたが，建築士として仕事をしています。建築士という職業の人は 115 万人もいて，一級建築士も 37 万人もいます。また，私は学芸員としても仕事をしています。学芸員は，美術館だけでなくて，実は水族館とか，植物園とか，動物園で働く人の中にも学芸員がいます。学芸員資格を取る人が年間 1 万人いて，資格に 30 年ほど歴史がありますので，大体日本に 30 万人ぐらいいると思います。そのうち博物館に勤めているのは，8,000 人ぐらいです。美術館や博物館の学芸員として，展覧会の企画をデザインする建築家もいないですし，美術館や博物館を建築家として企画や設計をする学芸員もいないだろうと思いまして，建築家と学芸員をかけ合わせた仕事を，自分なりに発明して活動しています。

建築の設計の仕事としては，このような一般的な商業施設の仕事をしました。これは原宿，表参道にある建物です。この近辺は準防火地域なので，建具に木製は使えませんが，いろいろな法的な工夫をして，木製建具を作って，ちょうど通り庭があるような町家的な形式を商業施設に作りました。その後，六本木ヒルズの設計に関わるようになりました。全街区のこともやりましたが，私が担当したのは，この中央にある六本木ヒルズアリーナという文化施設と映画館の設計でした。

また，森美術館に在籍してからは，建築の展覧会を企画しました。写真中央の「建築の日本展」です。先ほど平竹さんからも御紹介いただきましたが，昨年の展覧会で，54 万人ほど入館者がいました。建築と言いますと，非常に専門

的な分野だろうと思われるかもしれません。ただ，どこに観光に行っても，やっぱり建築を見に行ったり，建築でご飯を食べたり，結局美術館に行ったりするように，大体建物を見ていることが多いですよね。その意味では，建築との関わり方を考えていくと，面白い伝え方ができるのではないかと考え企画した展覧会です。

これが展覧会の様子です。例えば，左が桂離宮，右が藤本壮介さんという建築家の代表的な住宅です。この二つを比較して見てみると，説明は要らないぐらいに様々な要素，つまり日本の古典的な建築の遺伝子が流れていることがお分かりになると思います。こういったものは，住宅に限らず，様々な公共施設にも例があります。皆さん，近代建築は明治以降に出来上がったものだと捉えられていますが，そうではなく，今の生活にあるものは，縄文から現代まで全部つながっています。そのような継承性をテーマにしています。これは香川県庁舎の家具を持ってきて，ラウンジを作りました。こちらは待庵です。本物は大山崎にありますが，中に入ることができないので，このように中に入って見て，体験できるように原寸で作りました。

私が展覧会を作るときにいつも心がけているのが，単に発注して作るのではなくて，いろんな大学や数寄屋大工さんとコラボレーションすることです。なぜなら美術館は，一つの研究の発表の場であるという思いがあるからです。この写真では，ものつくり大学という日本で唯一の大工，左官等の職人の養成学校の 50 名ぐらいの学生たちに指導しながら，一緒に作り上げました。

これは，丹下健三の自邸です。近代建築の神様と呼ばれるコルビジェのサヴォア邸や桂離宮をハイブリッドして造った住宅と言われている名作です。現存していませんが，これの 3 分の 1 の模型を作りました。なぜ，3 分の 1 で作ったのか，誰が作ったのか。実は，宮大工さんが作ってくれました。この大きさの模型になると，張りぼてのいわゆる模型の作り方をすると，反ったり，曲がったりしてきちんとした形で立ちません。私は，模型というのも実は昔から日本の中にあったのではないかと考えています。街の中で，ちょうど 3 分の 1 か 4 分の 1 ぐらいの神社を見かけたことがありますよね。あれは，実はみんな宮大工さんたちが，本物の人が入れる神社と同じように，3 分の 1 か 4 分の 1 で作っているわけです。これこそ，日本の伝統的な模型だろうと思いました。この丹下健三の自邸も宮大工さんに樹齢 200 年ぐらいの小田原の山林にある木を使って作ってもらいました。継手や仕口もしっかり作ってもらい，建具も，全部建具屋さんが作っているので，きれいに動きます。今は，全部分解して森美術館のコレクションにしています。このように，単にものを展示するのではないという姿勢で仕事に取り組んでいきたいと思っています。

一方で，私は建築だけではなくて，美術館の中で展覧会の展示デザインや展示を作る仕事もしています。特に現代美術に関して取り組んできました。少し前に，「美術館の秘密。」という雑誌の特集（PEN2011 年 7 月 15 日号）で，「作家に提案したり，手助けしたり，偉大な黒子」として私の仕事が掲載されました。展示デザインと言うと，普通の展覧会の空間をきれいに作る仕事をイメージされると思います。でも，この写真のような仕事もしています。これは，現代美術の有名な作品で，イギリスのダミアン・ハーストの作品です。今まで，彼の作品は，NY のメトロポリタン美術館や，ロンドンのテートギャラリーなどで展示されてきましたが，日本では今まで一度も展示されたことがありませんでした。少し気持ち悪いですが，この作品は本物のウシを半分に切って，ホルマリンに漬けた水槽が並んでいるものです。展示作品だけを見るとこのまま運んできたように思えま

すが，この 1 個の水槽だけで 3.6 トンもあります。美術館のエレベーターは 3 トンまでしか載りませんし，中身がホルマリンですので，全て危険物です。日本の法律だけでも，建築基準法から危険物の取扱まで含めて，5 つぐらいの法律に抵触しています。これが展示している風景ですが，エレベーターに載りませんので，この水槽の中にある牛から，水槽からホルマリンから，全部をばらばらにして運んできました。そして，ホルマリン対策として，美術館の展示室の中にこのような仮の養生の小屋を作って，写真右下のパイプで外に換気をして組み立てました。作業はこのようなガスマスクを着けて行いますが，写真左の人物が私です（笑）。美術館の裏側は，展示作品を作るのが意外に大変です。

普通，美術館というと，床にものが置かれて，壁に絵を掛けられているというイメージがあると思います。しかし，特に現代美術の分野では，美術館が作家と一緒にものを作っていく空間であると言えます。

こちらは，私が京都に来る前に最後に森美術館で担当した仕事の「六本木クロッシング」の展示です。今，ちょうど展示期間中です。これは，ヒスロムという京都のアーティストグループの作品です。彼らは出身大学の地下の水槽に侵入して，そこで拾ってきたものを集めて，インスタレーションにし，さらにその活動を映像化しています。右上の写真のドラム缶ですが，中に水が入っていてモニターが上がったり下がったりしています。作品制作は，彼らと打ち合わせをしながら進めました。私との打ち合わせの中で，水槽でボートに乗った経験から浮力，浮いているということにこだわりたい，ポンプで水を上げて，ボートがべしゃっと天井にひしゃげていく，その瞬間を捉えたかたちを作りたい，でもどうしたらいいだろうという話をしていました。これは私のスケッチブックですが，このような感じで作家と一緒に向かい合って，作っていく仕事をしています。

今申し上げたように，現代美術の展示空間は，天井からいろんなものを吊ったり，映像機材を吊ったりと劇場のような空間です。

また，パブリックアートの仕事もやっています。下の写真が名和晃平さんの作品，上の写真は大巻伸嗣さんという作家の作品ですが，これらも作家と一緒に展示をしました。

作品の選定以外にも，都市計画の最初の段階から，どこにどういうものを置くかを検討します。なぜ，都市計画に関わるのかと言いますと，街が出来上がった後に，アート作品をぽんと置くことができないからです。こちらの花の作品は 10 トン以上はありますので，この下に地下空間があると支えられません。再開発では，地下道やいろいろな障害物がありますので，地下の部分の設計と，上の作品を連動させながら設計変更していきます。ほかにも，商業施設の中のアート作品の展示もしています。

そのほかにも，美術館と博物館のデザインの仕事もしています。これは，オーストラリアのゴールドコーストで行われたコンペに応募して，2 等になったものです。2 等は落選なのですが，ファイナリストまで残ったプロジェクトでした。ここで一番評価されたのは，この施設の中でどんな体験ができるかという断面を描いたことです。また，この施設を年間を通してどう活用できるかというルート，年間スケジュ

ール，入館者数などを算定して提案をしたのです。普通，建築のコンペというと，外観のデザインが重視されます。しかし，そうではなくて実際にそこで，どれだけの人が集まってきて，どんなことができるのかを具体的に示したことが大きく評価されました。

これは増上寺という東京にある徳川家の菩提寺です。歴代将軍が偶数と奇数に分かれて，上野の寛永寺と増上寺に眠っています。ここは，東京タワーとセットになったロケーションが有名で，外国人の方もたくさん訪れる場所です。この本殿の地下に，このような博物館を設計しました。中央の模型は，高村光雲が作成した模型で 1910 年に日英博覧会に出品されたすばらしいものです。英国王室のロイヤルコレクションになっていましたが，20 年ぐらい前に倉庫でぼろぼろの状態で見つかりました。それを修復して展示する施設として，修復方法や展示方法などを検討したのです。ちなみに，この模型が出品された 1910 年の日英博覧会が日本で初めて海外で行われた建築展です。

ほかにも，今，私が取り組んでいるのが，富岡製糸場の保存修復，活用です。富岡製糸場は全域が重要文化財で，スライド中央の 3 棟の建物が国宝です。この写真のように，国宝の建物の屋根を修復し，中を補強しています。その補強方法のほかにも，このスライドのような博物館にしていくための博物館そのものの設計，耐震補強の設計，さらにこれからどう活用していくかを検討しています。活用は富岡市のインタープリテーションの委員会で検討，共有しながら進められています。インタープリテーションとは，施設を活用するのに，単なる利益追求型のイベントをやるということではなく，そこの魅力をちゃんと伝えていくイベントや展示をやっていきましょうという思想そのもののことです。

また，先ほど平竹さんから御紹介がありましたが，京都市美術館もお手伝いをさせていただいています。京都市美術館は，来年の 3 月末オープン予定で，現代美術の新館ができます。私が森美術館で改修をしたり，実験したりしてきた機能的な部分や，現代美術の展示に特化した空間を作っているところです。

最後に，保存と活用についてです。先ほど事務局からの説明や京都市美術館の考え方にもあるように，今，保存と活用が非常に大きなテーマになっています。少し刺激的なタイトルですが，雑誌の記事で「稼げる保存」（日経アーキテクチュア　2018 年 5 月 24 日号）というテーマの特集がありました。富岡製糸場も紹介していただきましたが，京都市美術館は表紙にも取り上げられました。「文化財を保存する」と言いますと，何も活用しないで保存するということがよくあります。しかし，保存しながらどう活用していくか，京都市美術館でも大きな大陳列室の使い方をはじめ，いろいろと検討しているところです。

以上で私の自己紹介を終わります。ありがとうございました。

平竹：どうもありがとうございました。随分と世界を股にかけて御活躍されていらっしゃいますね。暮らしと文化との関係ですと，現代建築というのはだんだんと機能主義になっていると言われますが，住宅も徐々に世界中で違いがなくなっているように思えます。そう考えると文化は，どうなっていくのか，実際にいろいろ見てこられて何かお感じになっていること

はありますか。

前田：機能主義という話ですと，やはり，建築はある時代から世界中で同じかたちになっているという現状がありますね。特にそれが顕著なのが，高層型のマンション，オフィスビルです。オフィスビルを並べて見てみると，どこの都市のどこの街のオフィスビルか，その特徴は何もわかりません。私は，これに非常に疑問を感じています。先ほど申し上げた「建築の日本展」のように，現代建築は，伝統的である必要はありませんが，そこに日本の伝統建築をはじめとして，いろいろなエッセンスが入っているという設計は，絶対に可能だと感じています。最近の言葉だと，「グローバル」，「ローカル」でもない「グローカル」という言葉を使う人が多いです。様々な国の若い建築家もそれぞれの国の地域性を，いかに現代的に表現するかを考えている人が増えてきています。これからの時代は，おそらくこのようなことが分かりやすく見えてくると思います。

平竹：ありがとうございます。それでは，ここからお二人とのトークを進めていきます。

まず暮らしの文化と住まいの関係は，どういう関係なのでしょうか。やはり，井上さんの町家を大切にしたいという思いは，京都の文化を守るためには町家が必要だという考えや，反対に町家があるから守られている文化があるという考えとつながっていると思います。少し，大きな議論になってしまいますが，町家や文化を守るという視点で考えたときに，井上さんのように東京から京都に来た方や外国人の方で町家に住んでいる方が何を求めているのか，何を望んでいるのか，その動機を考えることが，議論のヒントになると思いますが，いかがでしょうか。

井上：まず，私が守りたいのは，必ずしも町家本体のみではありません。それよりも，暮らしそのものやハード面では町家を含めた路地などのもっと広い範囲での空間というのをイメージしています。

伝統的な暮らしと言うと，着物を着て，例えば全部電化製品を使わずに家事をするという生活のイメージを持たれて，よく誤解されます。それはもちろん現代の生活で良いわけです。どちらかというと，私がイメージする伝統的な暮らしとは，人々や地域の中での関係のことです。つまり地縁が重要だと考えています。それはなぜか。日本の都市は，防災上強くするために木造の建物で構成される都市から，明治以降鉄筋コンクリートで建物を作る都市になりました。建物の材料を換え，それに伴って道幅も広くして，発展してきたわけです。ですが，私が京都に来ていいなと思ったのは，そういう路地や，路地ぎりぎりに建っている町家，長屋でした。最初のイメージとして，日本にはやはりこのような木造の街が残ってもいいのではないかと思いました。では，いったいこれを誰が守っているのかと考えたときに，そこに住んでいる人たちの暮らしが守っているのだろうと考え至りました。例えば，1，2 メートルぐらいの路地で人とすれ違えば，当然会釈だけでは済まなくて，ちょっとした会話が生まれたり，そこに通る人のために緑を置いたりする人間関係や暮らしがあります。このハードの条件だからこそ，生まれてくるソフト，暮らしがあります。私は，

建築分野を研究していますから，ぱっと見はハード面を評価してしまいますが，でも実はそれを守っているソフトのほうに意味があるなと非常に強く思っています。

平竹：ありがとうございます。そうしますと例えば，何所帯か集まって相談しながら共同で住宅を建てるコーポラティブハウスのように，みんなが集まれる広場を作ることがありますが，そういう形態に近いものとして，路地をイメージしているということでしょうか。

井上：そうだと思います。京都には，たまたまその木造の建物が残っていて，だからその関係性があるというイメージです。

平竹：今までの話を前田さんはどうお考えでしょうか。

前田：まず，今のお話を引き継がせていただくと，ポイントは木造であることと，その都市やその街の中の小さな空間という 2 つの要素のお話だと思います。

木造は弱いとか，寒いとかデメリットの意見もありますが，ではどうして，これだけ地震の多い日本の国にずっと木造建築が残っているのか。これは，実は保存の問題にも非常に密接につながっていますが，木造の建物は地震があって壊れても，そこの壊れたところだけ直せば，すぐ復旧できますよね。明治以前は，建築のことを「建築」とは呼ばずに「普請」と言いました。普請奉行とか普請道楽という言葉をお聞きになったことがあると思います。地震で壊れたときに，プロの大工さんが軸組み，骨組みをきっちりと直してくれる。そこに，素人が地元にある土や紙を持ってきて，作っていくと家はすぐに直ってしまう。だったら，こっちのほうがいいじゃないかと，いろいろとかたちを変えながら作られていったものが現在の町家でもあり，現在の木造の建物です。一方，石造りの建物はもうご想像どおり，地震があって壊れたら復旧しませんね。

もう 1 つ，その直して変えていくときに，ちょっとずついろんな工夫が生まれていっています。それが暮らしの中から得られた知恵です。ここに普請という問題があります。家を建てるときには，建築家に何かいい提案をしてくださいと頼むと思います。でも，いい提案をしてもらうと言っても，誰か一人の有名建築家が提案できるものには限りがあります。長い期間の知恵をしっかりと分析していくと，路地にはこういう意味がある，こういうものなんだと考えていく。そのリテラシーをみんなで共有していくと，そのときに新しく作り上げて，少しずつ変えていったときに，そういった知恵が誰かのオリジナルなアイデアではなく，積み重なっていく。そうして元々日本にはなかった言葉である広場や，町家の中から生まれてくる路地空間に知恵が生かされていくと思います。

平竹：ありがとうございます。そういった街の中の空間としての路地と，木造の建物の場合は少しずつ直していくというお話でした。例えば，一番わかりやすい例では法隆寺が最古の木造建築と言われていますように，基本的には少しずつ直しながら残されてきたということだと思います。町家に住んでいる身としても，街中の家でも，例えば梁が少し傷んだから梁だけ替えましょうとか，柱を替えましょうとか，そうやって本当に何代も続いてきたのだという実感があります。もともと町家が最初にできたのは随分古い時代なのかもしれないのですけど，今のかたちの町家が確立したのは秀吉の時代からと江戸時代ぐらいです。そして，現在京都の街中にあるのは基本的には明治以降から昭和の初めぐらいまでの町家が圧倒的に多いと

言われています。

しかし，特に現代では社会の変化に伴って，直しながら住み継いでいくよりは，むしろ建物をつぶして建て替えるほうが多い感じもしますが，どう思われますか。

井上：京都の街は戦乱に巻き込まれていますし，また，やはり都市部には，昔からどうしても経済面を優先して，建物を作り変えていく例はあったと思います。一方で，農村部はどうかと言いますと，農村部の民家の世界では 200 年前の民家は，実は研究者の中ではあまり古いとは言われません。どちらかというと 200 年前は新しいほうです。300 年ぐらい前の民家だと，まあまあ古いね，そして 400 年前のものだと，かなり古い民家ですねと言われます。実は建物を代々住み継いでいくことは，都市部でもやろうと思えばできる。ただ，都市部にはそれよりも違う論理があって，建て替えられていってしまう。特に現代では，少子化や経済的などいろいろな要素で建て替えられることがより増えていくと思います。

一方で家電製品や IT 技術の発達によって，今までだったら家電製品が入ってくることが，町家にとっては不便だったことが，逆に解消されていくこともあります。例えば，電話が入ってきた。電話ができた時代は，町家よりもあとです。町家に電話があとから入ってくると電話線が家の中を這うので，みっともない。そういうことがあるとやっぱりこの家ではだめだ，建て替えようということがあった。ですが，今の時代はみんなが携帯電話を持つようになって，電話線が不要になりました。このような科学技術の発展が文化財を残す方向，何かプラスに影響する要素が生まれつつあるのではないかという印象があります。

前田：私もその技術という点については，非常に可能性を感じています。今，木造建築は超高層時代に入ると言われています。現在，木造の防火性能を高めていく研究は，本当に進んでいますし，井上さんからお話があったように，その技術面で，これはもうだめだからという理由ですべてをお釈迦にするという発想は，もう少し待ってみてもいいのではないかと思います。むしろ弱みを強みに変えていくような，何か新しい技術革新のアイデアで解決できることがたくさんあるのではないでしょうか。例えば，町家の場合，偶然にも解決されたのが電話，携帯電話だった。壁も近代に入ってからは左官のモルタルから進化していないのですが，そこからどうやったら進化ができるのか。やはり，これは様々な技術のテーマになっていく。

一方，いわゆる普通の機能的な近代建築の歴史の中において，経済合理性を考えて発明された様々な技術を伝統的な技術の中にこっそりと入れていくことができるとも思いますね。アイデアを持って考えていくということに，こういった技術の未来があるのではないかと考えています。

平竹：確かに，電話の例のように，これまで建物に少し合わないだけなのに，大きく変えないとできなかったことが，様々な技術が発達することによって，変えずに済んでいますね。古い時代の家を見に行きますと，電気線が後で付けられているのを見たことがありますので，理解しやすいです。

しかし，先ほどの井上さんがおっしゃったように 300 年ぐらいの民家が残っているというのは，どう理解したらよいでしょうか。その民家の中での暮らし方は，洗濯板から洗濯機になるように電化製品が使われて少しずつ変化はしているのでしょうが，基本的には暮らし方のベースがずっと変わらないから，建物が守られているということでしょうか。

井上：私は，個々の生活は変わっていると思います。そして，変わっていいと思っています。そんな不便な生活をずっと続ける必要はありません。ですが，例えば農村の民家などでは，都市部と違って今の時代も法事をするときなどに親族が集まる機会がある。そうすると，親族が集まる空間が家の中に必要である。そのときに 1 つの居間の中では入りきらないから，普段は仕切って使っているけれど，ふすまごと取り外して，大きい続き間にする。だから，こうした古い建物が残るのです。ですから，あるイベントに関して，どうしてもそこを残しておかなければならないとか，あるいは人間関係の中で必要とか，そういう理由があるものが残っていきやすいのだと思います。

平竹：ある部分の暮らしの文化が昔と変わらずに残っているっていうことなんですね。

井上：そうですね。例えば，わが家はもともとお茶屋さんだった古い町家ですが，キッチンは IH のキッチンですし，蛇口をひねればお湯が出てきます。町家で暮らしていると話すと，「冬は洗濯が大変ですね」とかよく言われますが，水で手洗いしているわけではありません（笑）。ちゃんと洗濯機で洗っていますし，もっと言えば，洗濯機は乾燥機付きです。だから，暮らしの文化には変わるものもあって良いのです。

平竹：例えば町家を残さなければならないとしたら，技術革新の面でどうなっていけば町家を残せるのでしょうか。

例えば先日，川井家住宅という町家が解体をされたことが報道されていました。川井家住宅は，「京都の歴史」全 10 巻の中で応仁の乱より前からあった唯一の町家だと書いてありますが，解体されたという記事の中では，実は，室町時代の部材は使われているが，18 世紀・江戸時代に改築されていると書いてありました。私はこの例から，いくら木造建築で部材が取り替え可能だとしても，建物として残していくことはできないのではないかと思いました。京都市は一生懸命に町家を残そうと条例を作ったり，様々な事業を展開したりしていますが，応仁の乱で約 500 年前，江戸時代でも約 200 年前に建てられて建物をずっと残していくのには，相当なインセンティブが必要なのではないでしょうか。そういった町家を残していくには，技術革新の面や，それ以外の要素もあるでしょうが，どうしていけば良いと思われますか。

井上：私はそもそも，その部分を残す必要があるのかと思っています。例えば，室町時代にできた建物が，江戸時代に作り変えられた。それは江戸時代の生活と合わなかったから変えられたわけです。あえて江戸時代の人たちに，ずっと室町時代の生活をしなさいという必要もなかったし，現代になってから，またその室町時代に戻す必要もないと思っています。文化財として保存していくならば，元の時代に戻していく必要があるでしょうが，人々が使う生活の中で変わっていくのは当然ですね。その変わっていく中にも程度があって，例えばわが家は，私が建築の専門ということもあって，和室は和室のままできるだけ残していますが，お宅によっては「いや，LDK にしたいんだ」という家もあるでしょう。ですから，家の中での生活に合

わせて変えていくところは，基本的にはそれでいいと思っています。ただ，建築分野に携わる人間のエゴかもしれませんが，可能ならば，それが文化財として保存するときのために，改修工事の際に元に戻るようになっていればありがたいですが。しかし，基本的には，変わっていくことは仕方がないと思っています。

平竹：前田さんは，先ほどユニバーサルな中にローカルなものを取り入れていくことが，これからは可能ではないかとお話されていましたが，この話についてもヒントはありますか。

前田：文化財保存として何かを残すという議論のときに自明のこととして，実際にそこに建っている建物を残すと決めたら，これをそのまま残すことだと考えていませんか。この考え方自体が非常に西洋的な考え方です。石造りの建物やローマの遺跡を残すから，もう壊れて崩れていてもこの形のままずっと残すという考え方ですね。

しかし，木造建築では，考え方や技術を継承して保存をしている例があります。一番良い例が，伊勢神宮の式年遷宮です。あの建物は 20 年しかたってない新品ですよ。柱や梁を新しいものに替えたらいけないのか。そこで残したいものはいったい何か。技術だったり，暮らしだったり，思想だったり，そういったもののほうが実際に目の前にあるものよりもずっと大事である。その考え方に立つと他にも実例があります。例えば，数寄屋建築の工務店や大工さんは，あらゆるお寺や民家の部材を残しています。彼らは，築 500 年ぐらいの民家が解体されると聞くと，現場に行って集めてきているわけです。その部材が，実はこのあたりのカフェやレストランに少しずつ使われていたり，民家を造るときに使われていたりします。

かつては違うところにあったものだけれども，今，ここに継承されている。日本では，そうした残し方もしてきました。文化財保存をするときに，アメリカはこうやって残している，ヨーロッパはこうやって残しているからすばらしい，そしてそれを継承した条例を日本で作るのだということではなく，ここはここでの残し方，何を残すのか，これをよく考えていくと，何か答えが見つかるかなと思います。

平竹：前田さんは，富岡製糸場の保存修復活動をされているということでしたが，それはどういうコンセプトなのでしょうか。先ほど，活用のことはおっしゃっていましたが，保存という意味ではどうですか。

前田：富岡製糸場は，明治に入って 150 年間，工場の蚕糸業の技術や機械が変わるたびに，実は建物も造り変えてきています。ただ，中には明治の最初に建てられたものも残っています。富岡製糸場は日本中から女工が集まり，製糸を学び地元に戻って日本中に製糸技術を広めるという教育機関でもありました。その建物の中には，その骨格や思想，考え方が厳然としてあります。

建物を保存・修復して，皆さんに見てもらうまでには，一定期間閉館して工事をするのが一般的なパターンです。ところが，富岡製糸場は 5.5 ヘクタールあるので，全部を修復するのに，実は 30 年かかると言われています。その 30 年間閉館して，せっせと修復して，やっと修復が終わりましたから見てくださいとするわけにはいかないというのが文化庁と富岡市の意見でした。ではどうするかと言うと，30 年間直しながら活用し，その過程を見せることで訪れるたびに違った姿が見えるようにする。富岡製糸場は世界遺産ですが，時代の変化に活用の仕方も寄り添って変えていこうというわけです。こうしたやり方は世界でも珍しく，国内でもほぼ

初めてのかたちだと思います。もちろん保存として，もともと作られていた瓦やタイルを焼き直すといったこともやっていますが，建物全体は保存しながら活用するという考え方の下でやっています。

平竹：ありがとうございます。先ほど井上さんから，地域を守っていくのには，その人間関係が大事だという話がありました。私は暮らしの文化を考えるときには，このことが非常に大きなことだと思います。空き家がどんどん増えているというお話もありましたが，住宅の戸数はどんどん増えているのに，空き家も増えている。結局，住戸当たりの人間が減っているわけですよね。一人暮らしや核家族が多くなると，集合住宅のほうが管理やセキュリティがいいから集合住宅に住むようになる例もあるでしょう。そうなると，なかなか地域でのふれ合い，関わりが減っていく。このような住環境の変化と地域の文化を守っていくことについては，どう考えておられますか。

井上：確かにマンションにお住まいの方のほうが，自治会への参加率が低いと感じています。私が空き家問題をテーマに研究するようになったきっかけが，実は京都市のお仕事をさせていただいたことにあります。当時で「京都市内に空き家が 10 万軒あります」と説明を受けたのですが，それとは別の場で「京都市には分譲マンションが 8 万 5000 世帯あります」というのを伺いました。あれ？空き家が 10 万軒で，マンションに住んでいる世帯が 8 万 5000 軒だったら，分譲マンションは要らないのではないかと思ったわけです。私は学生の頃に，どうして集合住宅が必要かというと，都市にみんなが流入してきて，都市部で建物が足りなくなったから高層化してマンションになったと教わりました。でも，現在はもうそんな時代ではない，むしろこれからは空き家が増えていくと思い，危機感を持って研究を始めたのがきっかけです。

そういう意味では，私たちはここで一度立ち止まって，分譲マンションが本当に必要なのかを考える必要ではないでしょうか。賃貸マンションと分譲マンションとで事情が少し異なりますが，分譲マンションの場合，そこを持っている人がみんなで建物を持っていて，権利がそれぞれに分かれているので，建替えや維持管理のときに様々な問題があるんですね。住戸ごとに構造が切れているような特別の場合を除き，あえて分譲マンションをこの時代に造る必要があるのかと考えています。

ですから，マンションというのは人間関係や文化の文脈と別にして，そもそも，立ち止まってもう造らなくてもいいのではないかという決断をする都市が出てきてもいいのではないでしょうか。

平竹：さりとて，とりわけ都市部ではマンションにお住まいの方も多いですよね。そういう人たちも，やはりその地域の暮らしの文化の担い手として，コミュニティに入っていただいて，一緒にその時代のその地域の文化を作っていくような仕掛けが必要ではないでしょうか。

井上：そうですね。建物のことを抜きに考えると，分譲マンションにお住まいで，お子さんをお持ちのお宅では，自治会には入りたくないけ

れども，地蔵盆には参加したいという例は結構多いですよね。そうすると，地域の人からすると，何にもしないのに入ってくるなとなってしまう。地域の方々の不満も当然わかりますし，マンション住まいの人の入れてほしいのにという声もよく聞くことですね。

だから，マンションにお住まいの方には，自分たちが知らない間にどんなことがなされているかを知っていただきたいですね。地蔵盆をするためには，地域の方がお地蔵さんのお水を替えたりしてちゃんと毎日お世話しています。そういうことにも参加していかなければ，お祭りのときだけ享受するのは違うのかなと思います。

あるいは先ほど防災の話もありましたが，京都は木造の都市でありながら，防災に強い都市のベスト 10 に入る都市でもあります。それはなぜかというと，火事が出たときに早い段階でちゃんと火を消すという地域のネットワークがあるからなんですね。また消防団の方々は火事が起これば，寝ずの番をしています。近所で火事があったときにボランティアの消防団が寝ずの番をしてくれているから，私たちは安心して夜眠ることができるのです。

こういうことを京都の地域はずっとやってきています。それを知って，感謝の思いや少し申し訳ないという思いから，私もできることはやろうとか，参加してみようかと自治会に入っていただく方が増えると一番良いですね。ですから，マンションにお住まいの方は，ぜひ地域がいったいこれまで何をしてきたかということを知っていただいて，参加していただけるといいなと思います。

平竹：前田さんは，京都に移られてからあまり間がないとは思いますが，これまで生活された場所では地域ごとの暮らしの文化を何か感じられたことはありますか。

前田：今の話に直接つながるかどうかわからないですが，やっぱり皆さん，お祭りが好きですよね。お祭りというのは，やはりそのコミュニティを作っていくときの非常に象徴的なものと言えます。そこに向かっていろいろな準備があって，その準備の段階でも，先ほどの消防団の話のように小さなやることがある。そこに参加して分かっている方は，皆さんが最後のところまで，その考え方等を共有していると思います。そこがおそらく，例えばマンションに住んでいる方には伝わってないのではないでしょうか。

私が六本木ヒルズという都市再開発のプロジェクトに関わったときの話ですが，大きな開発をやったら，街のコミュニティが壊れるのではないかということで反対運動がありました。ですが，広場ができると，その街の中の既存の様々な祭りや地域の学校行事，教育活動がその広場で行われるようになったのです。現在，その街の周辺も含めて最大の夏の盆踊りが六本木ヒルズで開催されています。古い商店街も，商店街のお祭りを同じ日にやってくれています。そうすると，それまでなかなか地の利が悪くて寂れていた商店街がどんどん活性化して，今度はそこにおしゃれなテナントさんが入っていくようになりました。青年団の人たちもやはりそれぞれいろいろな思いがありますが，開発が周りに開かれていったときに，影響を与えていくものも大きくあるわけです。

このような仕組みは，やはりマンションに住んでいる人たちはそこまで深くは知らないので，丁寧に伝えていく。その魅力が単に面白いとかではなく，場合によっては，例えば自分のお店がすごく儲かるのではないかとか，そういう経済的なことも一つの魅力として全部つなげて，今の時代に合った新しい仕掛けを考えていかなければならないと思っています。

平竹：その六本木ヒルズの盆踊りは，もともとヒルズができる前に行われていたものを復興されたということですか。それとも新たに始められたのですか。

前田：それは新たに始めたわけですが，それまでは地域の神社で時期もばらばらに行われていたものをある程度統合しています。もう一度地域の祭りをリデザインしていこうということですが，これまでも時代の中で常に行われてきたことだと思います。時代に合わせて再構成することは，何かしら先端的な感じで見えるわけではなく，ただきちんと整理されて，そこに経済合理性もあれば，実は納得感のあるかたちの解決の仕方でもあるのだと思います。

平竹：盆踊りを始められるときは，やはりその高層マンションにお住まいの方たちが，みんなで相談して決められたのですか。要するに，ある程度誰かが言い出して始めたとか，何かきっかけがあったのでしょうか。

前田：やはり六本木にも自治会がありまして，そこが主導しています。それに森ビルのタウンマネジメントのプロフェッショナルの人間が，プランニングとして事務局に参画して作っていきました。事務局の活動エリアも周りの商店街にまで広げ，そのエリアに出店する小さなお店や仮設のお店もプランニングしながらやっていきました。そうすると，そこの街を知らない人たちも非常に魅力的だと思って集まってくるので，さらに住人が増えるという現象も起きています。たかだか 15 年，20 年ぐらいのことですが，何年も活動していくなかで，もともとあるものを分析し，どう組み合わせて，どのように周りの人たちに知ってもらうかということが重要だと思いました。

平竹：今のお話を聞かれて，井上さんはどうお感じになりましたか。

井上：新しい建物ができて街が変わるけれども，そこでまた何か新しい文化が生まれていく，特に東京などのように変化していくことが前提の都市としては当然必要なことだと言えます。むしろ自治会なんか東京で作る必要があるのかと，面白く感じました。なぜ東京では自治会が必要なのか疑問ですけれども，でもやはり，そこで地域やつながりが大事だから，東京でもそうやって地域の文化などが守っていかれるのかなという印象を持ちました。

平竹：そうしますと，やはり地域のつながりが文化の基盤にある，また文化を生み出す元でもあるということでしょうか。

前田：しかし，私は，先ほど事務局の冒頭の話にあったような経済的な効果というものが人々の本心に絶対あると思います。文化を生み出していく元には，経済的な循環がなければいけない。その意味では奠都があったこの 150 年間の間に，京都は歴史的な都市であり，経済性を求めていくという命題を突きつけられていた。その当時にはインバウンドという言葉もありませんでしたが，全国に先駆けてインバウンド先端都市だった。文化と経済というのは，京都がこの 150 年間培ってきたノウハウであり，文化庁が移転した後もつないでいくということだと思います。

私は，町家の問題も含めて京都市政がこの 150 年間に歴史都市，文化と経済といったことに対して，どのように取り組んで，どのようなことがうまくいって，どのようなことが難しかったのかということに興味を持っています。そこに実は大きなヒントがあるのではないかと

思います。今，自治会のことが話題になりましたが，自治会につながっていく行政の方々からの大きな流れ，その流れに参画していた人達，そういったもの，一つ一つに様々な物語がある。それを実体験として自分で見て確かめていきたいなと思っています。

平竹：先ほど御紹介いただいた富岡製糸場も改修し，活用を図るということで，その周辺地域にも何か経済的な価値を生んでいく動きにはなっているのでしょうか。

前田：これからですけれども，いろいろと計画を立てています。

平竹：やはり，まちづくりはあくまでも住民主体ですが，先ほど前田さんがおっしゃったような，ある種のプロの方が入って，何か上手にコーディネートをしたり，井上さんが最初おっしゃったように，若者，学生さんたちが入って，いろんな新しいアイデアを出したりして，場が変わっていくことがあるのだなと改めて思いました。

最後に，今回は，文化庁京都移転の機運を醸成する連続講座ですので，文化庁への提言をまとめていきたいと思います。東京ではなく京都で国の文化行政が行われる，あるいは京都移転をきっかけに，法律が改正されたり，文化庁のミッションが変わったりという流れを受けて，こういう政策を少し打ち出したらいいんじゃないかという御提案や御意見を伺います。

井上さんは，最初の自己紹介で，個人や自治体レベルで町家を守るのは難しいとお話されていましたが，いかがでしょうか。

井上：文化庁には，京都のような木造の密集市街地が基本となっている街を，どうやって守っていくか，ぜひ考えていただきたいなと思います。例えば，東京や大阪では，こういった密集市街地をどちらかというと取り壊して再開発していこうという政策を作っています。ですが，もちろん京都はそういうわけにはいきません。街を作るときには，建築基準法や様々な法律に基づいているわけですから，例えば敷地いっぱいに木造建築を建てることはできません。しかし，京都の街自体が建築基準法から外れているものなので，例えば特区のようなかたちで，いかにそういった木造建築を残せるか，守っていくかを考えていただきたいです。

また，施策ではありませんが，最初の説明で文化庁の 7 割の職員が京都に移転するということを伺いましたので，ぜひ文化庁の方々には京都で伝統芸能を何か 1 つは学んでくださいとお願いしたいです。例えば，お茶を習うとします。お茶は総合芸術ですので，和装のことであるとか，焼き物のことであるとか，生け花のことであるとか，いろいろなことを知ることができます。そして，いったいそれを誰が担っているのか，実感して分かっていただけると思います。その人たちがどれだけ一生懸命に支えているかを知っていただいたうえで，では，国の施策としてどんなことができるかと考えていただけたら，地に足の着いた施策ができると思いました。

平竹：ちなみに，今，文化庁で京都にある部署のトップの方は狂言を習っておられますよ。

では，前田さん，お願いいたします。

前田：私も何を習ったらいいか，少し考えたいと思います。

会場：（笑）

前田：私は，文化庁が移転されて，こんなことができるかわかりませんが，建築の博物館を京

都にぜひ作っていただきたいですね。これはなぜかと言いますと，京都は寺社，仏閣だけではありません。先ほどからずっと話があったように，この 150 年，都市が変わってきた歴史があって，またそこでモダニズムの建物，有名な建築家の建物が非常にたくさんあります。

建築家は，京都で建物を造る，建築を設計するとなると，皆さん，もうみんな力が入ってしまうんですよ。そこに伝統的な京都にあったコンセプトで，そしていかに新しいものを作っていくのか，もう明治の建築家から，大正から，昭和から，みんなそうやって考えて作ってきました。ですので，実はこれ洋館だよねと思える建物にも，そこにはいろいろと秘密が隠されていることもあります。

そういう意味では，京都のまちづくりの歴史は，全部がつながっています。先ほど最初に申し上げた大正 11 年の土地区画整理事業のときに，大路の内側をきちっと守ることができたのは非常に大きなことで，普通だったら，都市がスプロール化してしまいます。例えば，他の小京都と呼ばれる街は，周りは普通の街なのに，ある部分だけ時代劇のような町並みになっているような保存の仕方しかできていません。それが，ここ京都は圧倒的に違います。京都市美術館もロームシアター京都も非常に名作ですし，京都には古建築から現代建築の名作まで揃っているのです。

また，京都タワーに至っては，竣工のときに，もうあらゆる文化人が，みんなでこぞって「東京タワーはあんなに立派なのに，何で京都はこれなんだ」という議論が新聞紙上を賑わし，様々な反対運動が起きたのに，今では皆さん，京都タワーも昭和レトロな建物として愛しているわけですね。そうやって時代が変わると，建築の評価は，全く変わってしまいます。建物ができるときに反対意見もあったのに，どうして変わるかと言うとその建物が皆さんに活用されて，愛されてきたから。東京タワーも「三丁目の夕日」のような映画ができると，とても愛される象徴になります。東京タワーもできた当初は，エッフェル塔をモデルにするというコンセプトでしたから，「エッフェル塔みたいに威厳がないじゃないか」とか，「何でオレンジ色なんだ」とか，いろいろと叩かれていました。京都タワーも同じような感じだったときもありましたが，今は皆さんに愛されている。

建築とは，そういうものじゃないかなと思いますので，ぜひこの生きた建築ミュージアムである京都に建築の博物館を作ってもらいたい，そしてそれができたらそこに就職したいなと思います。

会場：（笑）

平竹：ありがとうございます。京都はいろいろ歴史的なものがたくさんあるので，博物館という話はよくありますが，建築の博物館というお話は初めて私もお聞きしました。確かに近現代のものもたくさん残っているのは，おっしゃるとおりだと思いますし，あの京都会館を作られた前川國男さんですら，やはり京都と対決するのはすごく大変だということを書き残しておられますので，相当力が入っていたのかなと思います。

今日は「建築×暮らしの文化」をテーマにお話をしてまいりましたが，最後に何か一言ずつお願いしたいと思います。

井上：私が今日の話の中で，町家や路地が残ってほしいと言いながら，個々の生活の中では変えてもいいと言いましたが，では一体，どの部分を残したら良いのかという話を説明できていなかったので，補足をさせていただきます。

町家は間口が狭くて奥行きが長いわけですが，その途中や奥に庭があります。町家はあまり庭や緑がない建物という感じがしますが，そこだけはぽんと庭があります。我が家もそこに庭がありますが，お隣の町家も同じぐらいの位置に庭があります。そうすると，そこがつながっているので風が抜けたりとか，あとは隣のお子さんの声が聞こえたりとか，庭を介して何となく地域がつながっている感じがあります。そのような空間の骨格というものは，住んでいて実感として大変いいなと思うんですね。ですから，そういう骨格的なところは残していきたい。中の間取りを少し変えるくらいは，私はいいんじゃないかと思っていますが，そういう建物があって，庭があって，その奥にまた離れがあってという骨格，そしてその横にある路地が残っていくといいなと思います。ここまでが残すものだという考えは，おそらく人によって違うので，それはそれぞれの方がどうだろうかと考えていただければいいのかなと思います。

前田：さっきの文化庁への提言が最後だと思ったので，思い切り結論を言ってしまいました（笑）。ですから井上さんのお話につなげます。

骨格というお話がありましたが，私も全くそのとおりだと思います。今，井上さんから例に挙げていただいたものは，ものすごくたくさんある骨格の中の一つです。その骨格というもののリテラシー，知識，それが知恵につながると思います。例えば景観条例のような条例もそうですが，建築基準法には，建物を造っていくときに，目の前が計画道路だから何メーターもある歩道を作りなさいという規定をして，建物をセットバックさせることがあります。これは道路を太くしたい行政の人たちが，2 車線にできない道を 2 車線にすることを狙って作った法律です。でも，町家の庭の例に当てはめて，同じ理屈で「このエリアの路地の向こうの庭のこの形は変えてはいけない」という法律はなかなかニッチで，やりにくいわけです。

こういったことも実は骨格の中の一つで，それは法律で縛ることはできないのですが，この町家の庭があると何を生み出していくかという型の部分やどのようなメリットがあるのかということを，誰かが努力してもっとたくさん研究して使えるということを伝えなければならない。私は展覧会等を通して，そういった骨格の魅力をできるだけ伝えていきたいと思っています。そして，それを見た若い建築を志す人や，建築を造ろうとしているお弟子さんといった人たちが，いいものを作るために考え始めるのではないかと思っています。

今日は建築と暮らしがテーマですので，最後に，本来，建物は建築家や専門家が造るものではないのですよということを申し上げたいです。先ほど申し上げた「普請」という言葉に象徴されるように，やはり良いクライアントがいないと，良い建物は絶対に生まれません。建築家は，デザインをするだけと言っても過言ではありません。クライアントがコンセプトや思想を考えて，設計者が造る。そして設計者が去っていった後に，そのクライアントがそこを活用していくわけです。そこには，住民の人たちがみんなで参加して造る場面もあります。昔からみんなで屋根を葺き替える例があるように，実際に建築は誰が造っているのだろうと考えると，それはもう本当に大勢の人たちが関わって造っているわけです。ですから，建築は誰かの作品というものではないと私は思います。

平竹：どうもありがとうございました。今日は「建築×暮らしの文化」をテーマに，井上さん，前田さんからお話をお聞かせいただきました。

京都は，長い歴史のなかでいろいろなものをずっと残してきました。それだけに行政を含めて街に課題が多いということも事実かなと思いますが，やはり何らかのかたちで，この京都の遺伝子をずっと残していかなれければならないと感じています。文化庁が京都に移転したら，ぜひその一翼を文化庁にも担っていただく，それを目指していくことが必要だと思いました。

本日は，井上さん，前田さん，貴重なお話を聞かせていただきまして，どうもありがとうございました。

会場：（拍手）